

研究の内容

(1) 1年次「読み取る」について

【国語科】

一昨年度まで3年間、社会科を中心に研究をしてきた。社会科では、「調べる」活動が不可欠である。江波小学校では、「調べる」ことを、独自に3つのステップにまとめて、研究を進めた。

昨年度、教科を国語科に変えた。手探りでのスタートだったが、その3つのステップは、国語科にも通じるものがあった。以下が、それをまとめた図である。

資料or 文学教材 読み取りの3ステップ

	社会科	国語科
ステップ	資料が読める（表題が読める。傾向をつかむ。）	教材が読める（何が書いてあるか。正しく音読できるか。）
ステップ	資料がわかる（内容を理解する。比べる。）	教材がわかる（そこからどんなことがわかるか。どのような状況か。）
ステップ	資料から自分の思いをもつ（資料にないことを予想する，仮説をたてる。）	教材から自分の思いをもつ（自分なりの読み取り。心情を推測する。）

そして、応答し合う集団の基礎的な力として、各学年で文章を読み取る力をつけることに取り組み、全体研究会等で共有を図ってきた。その結果、以下のようなことが取り組みとしてあげられた。

音読

毎日の音読カードの活用（家庭学習）・音読の仕方の工夫・動作化の取り入れ・音読記号の活用・音読大会などのイベントなどを、学年ごとに、また教材ごとに工夫して取り入れる。

話し合いの場面作り

友達の発言を聞き合うことで、意識していなかった文中の言葉に気づかされてより自分の考えを深めたり、話し合いの楽しさを味わったりすることができる。

教材研究

一つの教材の中にも様々な教材解釈があり、教師の深い考察が必要である。教材の中心テーマをよく吟味した上で、教材の中のどの言葉にこだわって解釈するか、どの言葉にこだわって授業を組み立てていくか、教師の発問はどの言葉を選ぶか、ということが教材研究の拠り所である。

(ア) 授業の構想

- ・ 45分間の授業の中に、音読や視写などのスキルアップをはじめとする様々な活動を取り入れる。その構想の中に、コミュニケーションの時間10分を確保するなど話し合いを授業の山場に持ってこれるように授業を作っていく。
- ・ 国語科を段階的にとらえ、(1) 何が書いてあるか (2) そこからどんなことがわかるか (3) 自分はどうか、という三層構造で授業を組み立てる。

(イ) 発問

- ・児童が応答し合うために、主要発問は、「ぐっと引きつけて」「シンプルに」「くり返さずに」行う。
- ・児童の反応があまり見られないと、つい教師側で補助的な言葉を付け足したり、言い換えをしたりしがちであるが、児童はよけいに混乱することになる。最初の発問で挙手が少なくても、その少ない児童の発言からより多くの児童へ発言が広がっていくこともあるので、あせらずに児童の反応を待つ。

(ウ) 板書

- ・低学年ほど、板書はシンプルで分かりやすいものにしたい。発言者の思いを大切にその言葉はみな板書をした場合は、主人公の思いを想像するなどの場面などを選び、その発言をなるべく板書をするなどの方法が考えられる。
- ・高学年になるにつれ、児童の思考の一助となるような板書を目指し、必要とあれば分かりやすい言葉に置き換えたり、図式化したりといったことも可能である。

【言葉にこだわった取組】

また、年度途中からは特に、

言葉にこだわった教師の発問・切り返し

(1) 対子どもの言葉 (2) 対教材の言葉 (3) 対教師の言葉

にこだわり、教師の発問による子どもの反応に重点を置いて、研究を進めてきた。

教師が正解を求めるような声かけや、教師の意図に沿った発言のみを聞いていると、子どもはだんだんしゃべらなくなる。子どもの思考に沿った、子ども中心の授業をしていくという意識が大切である。

一人の発言に対して「そうだね。」と何度も反応してしまうと、子どもたちは教師ばかりに話すようになり、学習が深まらない。子どもの発言に突っ込んで、その発言の内容を深めることは必要だが、子どもの発言を拾い上げて、例えば「みんなどう思う？」など、クラス全体の子どもたちに広げていったり返していったりすると、その子と教師だけのやりとりになることを避け、クラス全体で応答し合う方向へもっていける。

教師の発問による子どもの反応に重点を置いて取り組むことによって、教師の発問・切り返し、子どもの反応を大きく変えることがよくわかった。

【学級づくり】

『応答し合う授業づくり』のベースになるのは、各学級での、お互いの考えを認め合う土壌づくりである。

- ・どんな発言も大切にすることによって、意見をいいやすい雰囲気を作る。
- ・間違いを笑わない雰囲気を作る。
- ・一人一人に自信をもたせるような取組。自信が出てくると寛容な心も芽生え、集団の中で自分を出せるようになる。
- ・肯定的評価によって自信をつける。

といったことを意識した学級づくりが、有効であった。

【聞く・話す】

各学年の取り組みをまとめる中で、応答し合う授業づくりの、土台と位置づけられる。「聞く・話す」に関して、江波小学校でつけておきたい力を、以下のようにまとめることができた。今後のベースにしたい。

「聞く」のステップアップ

ステップ	応答し合う授業づくりの系統性の面から	具体的な姿
	座り方 話の聞き方（目と 耳と 心で 聞こう）	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手を見る ・物を持たない ・しゃべらない
↓	反応を示しながら 自分の考えと比べながら	<ul style="list-style-type: none"> ・うなずきながら ・話し手の良い点に気づく ・自分の考えと比べる
↓	話し合う中で、自分の考えが高まったり深まったり	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を修正して ・自分の意見をまとめて ・発表のつなぎ方を考えながら

「話す」のステップアップ

ステップ	応答し合う授業づくりの系統性の面から	具体的な姿
	型を習得する <ul style="list-style-type: none"> ・発表の仕方（「はい、・・・です。」） ・声の大きさ 1・2・3 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はい」 ・みんなの方を向く ・はっきりした口調で ・「～です」「～ます」
↓	筋道を立てて話す	<ul style="list-style-type: none"> ・筋道を立てて話す（結論 根拠） ・わかりやすく話す（例を挙げる）
↓	自分の言葉で話す	<ul style="list-style-type: none"> ・意見をつなげる（つなぎ方を選ぶ） ・指名なし発表 ・ディスカッション自分の意見を修正して

(2) 2年次「考えをもつ」について

『応答し合う授業づくり』では、友達の考えを聞いて自分の考えが高まることを目標にしている。そのためには、自分の考えをもつことが前提となる。

考えをもたせるためには、国語の読み取りの力をつけることが必要であるし、友達の発表を聞く力もつける必要がある。

2年次の研究は、1年次の「読み取る」ことを含めて、子どもたちが「考えをもつ」にはどのような手だてをとっていけばいいのか、研究を進めていきたい。

研究部では、以下の点を視点として挙げる。

教師の言葉を大切に！

教師のちょっとした言葉で、子どもの反応はがらっと変わる。今年度も教師の言葉による子どもの反応に注目し、全体研究会では、授業記録をとって協議会に生かしていきたい。

きらりと光る座ったままの発言（つぶやき）や、予期せぬ反応があったときに、教師がどう返すかが問われる場面が多いので、

- ・日々子どもの言葉を大切に、生かして行く実践を積み重ねていくこと。
- ・自分以外の授業をなるべく多く見て学ぶこと。

を、大切にしたい。

書くことに重点を置いて

長い文章が書けない、豊かな文章表現ができない児童が増えている。ワークシートやノートに自分の思いを書いてから発言する場面がよく見られるが、書けていないと自信を持って発言できない。単発的な言葉しか書けない児童は、単発的な発言に終わることも多い。また、書くのに時間がかかると発表の場面の時間の確保が難しくなる。応答しあう集団として豊かに言葉を交わし、共に高まっていくことを目指すために、国語の時間の一部や朝学習などを使って、各学年で取り組み、全体研究会で交流していきたい。

(例)

- ・量を書く 行をうめるように意識して声かけをする。
- ・見て書く 朝学習や授業時間内に、意識して視写を取り入れる。
- ・自分の思いを書く 文章を報告文にしない。自分の思いを入れる。「楽しかったです。」という文章に対して、どう楽しかったのかなどつつこんで指導する。

自信をもたせる取組の継続

書いているが発表できない、長い文章で話せない、答えが決まっているものは挙手が多いが説明や意見を話す場面では挙手が少なくなる等の課題の背景には、「自信がない」ことが挙げられる。音読（声を出す）、スピーチ、小集団での話し合い、書いてから発言する、発言カード、といった、国語科からの取組も考えられるが、上の課題に対するアプローチとして、例えば以下のようなことに取り組んでみたい。

- ・子どもの言動を、意識してプラス評価することにより、自信を持たせる。同時に、いい言動をクラスに浸透させていく。
- ・教師が正解に固執しない。極力「正解」という言葉を使わない。
- ・子どもの間違いをフォローする発言を強く意識する。
- ・友達の考えの通訳、言い換えのパターンを使う。
- ・友達同士の声かけを促す。
- ・拍手等、子ども同士励まし合える活動を多く取り入れる。
- ・失敗を楽しむ遊び（勉強ができるできないがあまり関係ない遊び）を多く取り入れる。